私生活

神吉拓郎

文藝春秋

私生活

神吉拓郎

私生活

昭和五十八年十一月二十日　第一刷
昭和五十九年三月十五日　第四刷
定価　一二〇〇円

著者　神吉拓郎
発行者　西永達夫
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三ノ二三
印刷所　凸版印刷
製本所　加藤製本

乱丁・落丁の場合はお取替えいたします

©Takuro Kanki 1983　Printed in Japan

目

次

つぎの急行　7
たねなし　19
丘の上の白い家　33
ご利用　47
六日の菊　61
警戒水位　75
かけだし老年　89
釣り場　105
小夜子　119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

冬眠 135
鮭 149
背中 163
待たれる 179
よろよろ 193
シングルス 209
もう一人の女 225
季節労働者 239

装画　*Andrew Murray*

AD　坂田政則

私生活

つぎの急行

なまあたたかい夜だった。

戸川は、国電を降りると、所在なげに、出口の方へ歩いて行った。

乗り継ぐ筈の私鉄の急行に、まだ半時間もあった。私鉄の駅は、国電からコンコースで連絡しているのだが、構内で待っているのも退屈である。

戸川は、思い立って、ぶらぶらと駅前へ出てみた。

彼はこの街をいくらか知っている。

駅前の広場を取り囲むビルの群は、かなり立派な眺めだが、ひと側入れば、そこはもう雑然とした横丁であり、パチンコ屋や、キャバレーや、小料理屋がひしめいている。更にもう少し歩き続ければ、その賑わいもかき消すように失せてしまって、暗澹とした家なみのなかに、トルコ風呂のネオンや、さびれた飲み屋の赤い提灯が点在するだけになってしまう。

戸川には、この、いかにも場末然とした街を歩くのが、一種の息抜きになった。多少見くだしているようなところもある。キャバレーの入口で嬌声を挙げているホステスの衣裳はひどく下卑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ているし、この時間、おもてを歩いている男女たちの姿は、水商売なのか学生なのか、それとも勤め人なのか見分けもつき難いが、都心の勤め先から帰ってきた目には、一様にかなり野暮ったく見える。気安く馴染めるというわけには行かないが、気が張るところもない。

戸川は、ひときわ毒々しくネオンの光が溢れた一劃へ、足を踏み入れた。

たちまち、キャバレーの客引きが甲高い声を掛けてきたが、あまりいい客とは見なかったのか、お座なりにひと声掛けただけで、すぐ朋輩との立ち話の続きに戻って行った。

彼はこうした界隈での冷かしが苦手だった。声を掛けられると緊張してしまう。うっかり受け答えをしていると、結局は連れ込まれる破目になりそうな気がする。

事実、甘言に乗せられて入った店で、気詰りな思いをした挙句にボラれた経験があった。荒い口はきけないたちだから、女の子に鼻面取って引き廻されたような結果になるのがオチだと、自分でも諦めている。

彼は、自分のそんな性格を、抑制の利く性格だからだと信じている。つまらない所で争ったりはしないが、しかし、いざというほどの大事に直面したら、その時は徹底的に人と争うだけの気概はあるのだと自負している。

ところが、妻の英子は、他人に対する彼のふだんの控えめな態度がじれったいらしく、或るとき、

「あんたは、ブレーキしかない人ね」

と、冷笑した。ブレーキだけで、アクセルのない車のようだというのだ。

そのとき、戸川は笑って受け流したが、その時受けた疵は、今でも消えていない。当の英子は、とうに言ったことなど忘れているが、その時を境にして、戸川は、夫婦間の理解などということを考えるのはやめにした。

「あら、もう帰るの。飲んでらっしゃいよ」

誘いかける女の嗄れた声を聞き流しながら歩いていると、ひと足先を、覚束ない足取りで行く男の後姿が目に入った。かなり酔っているようで、ぶつぶつと何か呟きながら、ごく緩慢に動いていた。歩くというよりは、むしろ、のたくるという方に近いかもしれない。

その横丁では、酔漢の姿など珍しくはないが、戸川が目を惹かれたのは、その男の身なりや背恰好に、どこか見憶えのようなものを感じたからである。

誰か知人だろうか、という疑問と同時に、顔を合せたくないという気持が働いて、戸川は足を停めた。相手はしたたかに酔っているようだし、場所柄も感心しない。勤め帰りに、一人で、安キャバレーを冷かして歩いていたなどと吹聴されたりしたら、噂としても、あまり芳しいものとはいえない。戸川にもその程度の見栄はある。どうせ誰かと出っくわすのなら、もう少々ましな土地で願いたかった。

戸川が立ち停って様子を窺っていると、先を行く酔っ払いは、一軒のキャバレーの門口に佇んでいるホステスのところで引っかかってしまった。

なにやら濁声を張りあげている。

戸川も、ちょっと気恥かしくなるような露骨な表現で、そのホステスのお尻の見事さをほめ上

げている。それだけ見事なお尻に触れることが出来たら、男としてまさしく本懐だろうと思うが、ほんのちょっとその幸運に与らせて貰えないだろうか、そんなふうなことである。

相手のホステスは、あからさまに厭な顔をして、棄てぜりふを吐くと店の中へ入ろうとした。事実、盛りあがった見事な臀部に戸川も目を惹かれた。そして、酔漢の眼識の確かさに感心した。

ホステスが逃げ腰になったのを見て、その酔っ払いは、勝ち誇ったように、追討ちの一言を放った。

「ざまあみろ、――」

その嘲りの言葉は、あまりに具体的で、そのままここに記すわけにはいかないが、要するに、非常に寛闊な状態を表わす擬態語と、女性の或る部分の愛称を組み合せたものだった。

それを耳にして、彼女は勃然と怒りを発した。くるりと振り向くと、怒鳴り返した。

「なにさ、助平」

次から次へと、機関銃のように、悪口雑言が彼女の口をついて出た。その辛辣で、奇抜で、露骨な表現には、すこし離れた物蔭にいる戸川の顔も赤らんでくるようだった。

酔っ払いの方も、すこしの間は負けじと逆らってみたが、何分にも不利だった。語彙も足りず、迫力も数段劣っていて、誰の目にも勝敗は明らかだった。

彼女の繰り出す言葉のパンチのなかでも、目立って相手を打ちのめしたのは、お前さんなぞは、家に帰って、配偶者にお願いをして、古くも懐かしいあの部分を舐めさせて貰っていればお似合いで、第一、舐めさせて貰ったこともありゃしないに違いない、と決めつけた一撃で、酔漢は、

まともにその毒気を喰って、反抗する力も萎えてしまったようであった。そして、ぶつぶつと、言葉にもならない呻きを洩らすと、よろめきながら退却を始めた。

思いがけず彼が自分のいる方へ戻って来るのを見て、戸川はたじろいだが、酔漢は、彼の姿など眼中にない様子で、前を通り過ぎて行った。

通り過ぎて行くときに、その顔を盗み見た戸川は、初めてその男がどういう種類の知合いなのかに気付いて、思わず声を挙げるところであった。そして、慌ててそれを呑み込んだ。

「草葉さんが……、まさか」

人違いなどである筈はないが、それでも、戸川にはまだ信じられなかった。彼と解ってみてもとても声をかける段ではなかった。

つぎの急行には、やっと間に合った。

草葉は、隣の車輛に乗っていた。その時間になると、車内は空いていて、どこに坐ろうと勝手である。

戸川は、ときどき、硝子越しに、後の車輛の草葉の様子を窺っていた。

草葉は、すっかり酔が廻っているらしく、坐っていても、頭がぐらぐら揺れている。かっと目を開いて、なにか口走るようだが、すぐに目をつぶって、またぐらぐらと揺れ始める。いくつかの駅を電車が走り過ぎるうちに、とうとう横になって、どうやら本格的に眠ってしまったらしい。

草葉は、戸川と同じ団地に住んでいる。その団地は、一戸建の家ばかりで、草葉の家は、戸川

の家の三軒ほど先にある。

比較的新しい団地だったから、どこの家も、まだ越して来てから日が浅い。

戸川の家は三年くらいになるだろうか。草葉の家は、もっと新しい筈だ。

戸川と草葉はほぼ同年輩で、三十代の半ばだが、ふだんのつき合いはなかった。ただ、団地の自治会で、顔を合せる程度である。

草葉は銀行勤めで、そこを買われて自治会の経理を引き受けさせられていた。さすがに本職だけあって、手馴れたものだと、一同から信頼されていた。

彼は、団地の人々に対する場合でも、すこぶる慇懃で、戸川などは、彼と団地の運動会の支出の件で相談をするにも少々照れ臭い思いをした。もう少しざっくばらんにつき合って貰いたいと思っても、草葉は慇懃の衣を筍のように幾重にも着込んでいて、いっかな脱ごうとはしないように見えた。

彼は、団地の中を通っている広い道路を歩くときでも、ビルの狭い廊下を歩くときと同様に、絶えず気を配っていた。向うから誰かが来ると、行き会う間際に、肩を狭め、半身になって、道を譲ろうとする気配を見せる。数人が並んで歩けるほどの幅があってもである。譲られそうになった相手は、思わずどぎまぎして、足並みに狂いを生じ、照れたように挨拶する。すると草葉は、慇懃に挨拶を返し、腰をかがめるようにして、相手が通り過ぎるまで、半身のまま待つのである。これをやられると、初めての人は恐縮しきってしまう。馴れた人でも、道の向うから草葉が、油断なく気を配りながら、まっすぐこっちへやってくるのを見かけると、なんとなく尻のあたりが

むずむずするような、妙な気分に襲われるのだった。
草葉の細君は、背の高い美人である。いくらか神経質な感じだが、身だしなみのいい女だった。戸川は、ごくたまにすれ違う程度だが、彼女の身だしなみのよさに気がついていた。髪はいつもきりっと後に詰めて、バレリーナのようにまとめている。団地の、ほかの主婦たちは、どこかしらだらけたところがあって、歩きかたや口のきき方、服装などに、家庭生活や子供にかまけきった隙がまる見えなのだが、草葉の細君には、そんな様子は見られない。子供がいないということもあるが、美人なのに、どこか色気が乏しく、取りつく島もないような感じを抱かせる。
戸川の妻の英子は、彼女にあまり好感を持っていないようで、
「お堅いのよね。困っちゃうわ」
と、鼻で笑う。
「ひとりでクラシックなんか掛けて聴いてるの。凄いわよ、家のなかなんかぴかぴかに磨き上げちゃって、お掃除狂なのかしらん」
「掃除狂なんて羨ましいね」
と、戸川が、散らかし放題の我が家のなかを見廻しながら言う。
「あら、子供がいないせいよ。家みたいに二人もいてごらんなさい。片付けようがないわ」
「それにしてもひどい。惨状というべきだ」
「うるさく言わないでよ。私だって、子供がいなけりゃ、舐めたように綺麗にするわよ」
もののはずみで、そんなふうに話が捩れるのはしょっちゅうである。英子は決して負けていな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com